2022年1月21日版

PROSODY AND GRAMMAR FESTA 6

■ポスター発表はZoomのブレイクアウトルームを用いて行います。

1月30日（日）13:20-14:35	ポスター発表
	Aグループ（13:20-13:55）
1	「体言化理論から見たアワディー語の「関係節」」 池上 晶一（大阪大学）
2	「日本語無声阻害音および母音の持続時間とモーラ長との関係」松井 理直（大阪保健医療大学）
3	「日中語の授受補助動詞構文の相違点 ―恩恵性を中心に―」趙 蓉俊子（新潟大学）
4	「異なるスタイルの発話における音響特徴の分析」芝本 英[*1]・守本 真帆[*2]・荒井 隆行[*1]（[*1]上智大学，[*2]国語研）
5	「福岡市方言における「確信」を表すイントネーションについての初期報告」小川 晋史（熊本県立大学）
6	“The Prosodic Realization of Accented Words after NPI: Gender-based Differences” Le Xuan Chan, Keitaro Mitsuhashi, Kotone Sato, Rina Furusawa, Rin Tsujita, Seunghun J. Lee (International Christian University) [英語で発表]
	Bグループ（14:00-14:35）
7	「シンハラ語における「限定」のとりたて表現と語順：コーパスを用いた研究」吉田 樹生（東京大学）
8	「移動表現における多重表示の冗長性と類型論」長屋 尚典[*1]・鈴木 唯[*1]・谷川 みずき[*1]・林 真衣[*2]・諸隈 夕子[*1]（[*1]東京大学，[*2]東京外国語大学）
9	「愛媛県中予方言の主格標示と対格標示：Differential Argument Markingに着目して」宮岡 大（九州大学）
10	「日本語における状態変化の類型的特徴：構文の多様性とその頻度」松本 曜・氏家啓吾（国語研）
11	「閉鎖音と後続母音間に見られる同化効果及び対比効果」石橋 頌仁・竹安 大（福岡大学）
12	“Prosodically prominent clitic: the exclusive particle tu in Swahili” Shigeto Kamano (International Christian University), Yuko Abe (Lanzhou University), Kumiko Miyazaki (Global Center for Kiswahili Studies and Advancement), Seunghun J. Lee (International Christian University, University of Venda) [英語で発表]

大阪大学　言語文化研究科
言語社会専攻
博士前期課程 2 年
池上晶一

演題
体言化理論から見たアワディー語の「関係節」

要旨

主に北インドで話されるアワディー語では、関係詞が主名詞の有生性に応じて語形変化する。本発表では、同現象を Shibatani（2017）の体言化理論の観点から分析する。

先行研究では、日本語の「内の関係」に関する議論（寺村 1992）に見られるように、節内から名詞句が移動し、それが主名詞となって関係節構造が作られると分析されることが多い。しかしながら、上記の分析では、主名詞がない場合でもアワディー語の関係詞が有生性の標示を受けることを適切に説明できない。一方で体言化理論は、通言語的観点から、関係節を名詞に準じる構造とし、それ自体がモノ的概念を表示すると主張する。同理論に則れば、当該言語の関係詞は主名詞による一致を受けているのではなく、関係節それ自体が、主名詞とは何ら関係なく、有生性の概念を表示していると説明できる。以上より、アワディー語の関係節に関しては、体言化理論の分析が有用であることを主張する。

氏名：松井理直
所属：大阪保健医療大学
演題：日本語無声阻害音および母音の持続時間とモーラ長との関係

要旨：
　よく知られているように，音節構造は子音と母音の持続時間に一定の効果を及ぼす (Hause 1961 他)．例えば，英語では有声子音に先行する母音の持続時間が無声子音に先行する子音の前よりも 1.5 倍くらい長いという有声性効果 (voicing effect) が観察される．この効果は，日本語でもある程度観察されるものであるが (Yoneyama and Kitahara 2014)，同時に先行子音と後続母音の間に生じる補償効果も強い (Hiki 1967)．また，これらの効果は，音韻性によってもかなりの変動が起こる．こうした持続時間の性質を決める各種要因を洗い出すことは，Articulatory Phonology や C/D モデルといった定量的な調音モデルを組み立てる上でも欠かせない．
　本発表では，『日本語話し言葉コーパス』(Maekawa 2003) のコアデータを用いて，日本語における無声阻害音と母音およびモーラ長との関係について再検討を行った．調査の結果，無声破裂音の閉鎖区間・帯気区間，無声摩擦子音の持続時間，母音長といった要因の中で，無声破裂音の帯気区間はモーラ長との関係が最も低い結果となった．この性質は，日本語の [p], [t], [k] 音が破裂音か閉鎖音という議論と関連すると共に，日本語モーラのタイミング点 (CV/VC)についても一定の知見を与えるものである．以上の結果を踏まえ，発表では，特に C/D モデルに基づきながら，日本語の分節音持続時間とモーラ長との関係について議論を行う．

日中語の授受補助動詞構文の相違点
―恩恵性を中心に―

新潟大学大学院　現代社会文化研究科　趙 蓉俊子

本発表では, 日本語と中国語の授受補助動詞構文となる V てくれる構文,V てあげる(やる)構文, V てもらう構文, “V 给” 構文の統語と意味の相違点を明らかにする。授受補助動詞構文とは, 「動詞−補助動詞」という形を用い, 補助動詞が前項動詞V_1の「テ形」に後接する文である。これまでの研究は,ヴォイス的特徴や恩恵・非恩恵の意味を巡って議論されてきたが,「肩を温めてあげると痛みが和らぐ」という自分自身にとって好ましい変化をもたらす自己恩恵の文や,日中語の相違点については未解明のままであった。

本発表では,授与補助動詞構文と受納補助動詞構文に分けた上で,人称制限や間接目的語が必須かどうかという統語の面や,授与者の意図性,発話時点で授与者は自分がこれからの恩恵行為をすることを知っているかどうか,授与者の恩恵行為は予測可能かどうかという意味の面を巡って日中語の相違点を考察する。なお,日中語は授与者が恩恵を施す意図性や働きかけ性によって,恩恵,非恩恵及び自己恩恵を表す場合に関しても大きく異なっていると主張する。

氏名（所属）：
芝本　英（上智大学　理工学部）
守本 真帆（国立国語研究所　理論・対照研究領域）
荒井 隆行（上智大学）

演題：異なるスタイルの発話における音響特徴の分析

要旨：
本ケーススタディでは、一人の女性によるスタイルの異なる発話（アナウンサー発話と自然な発話）における音響的特徴について、センテンス内のピッチ平均およびピッチレンジ、フォルマント値、母音および子音の持続時間、気息性などに注目して分析を行った。男性によるアナウンサー発話に関する先行研究（桑原・大串1983）と同様に、ピッチ平均にはスタイルによる差がみられず、ピッチレンジはアナウンサー音声の方が広い傾向にあった。一方、アナウンサー音声の母音の質では先行研究のような母音空間の広がりがみられなかった。また、子音や母音の持続時間、ポーズの時間などは自然な発話の方が長く、気息性が低い傾向にあった。アナウンサー音声に関する先行研究および丁寧さに関する先行研究の結果と照らし合わせ、発話における明瞭さとあらたまり度の関係について考察する。

＜参考文献＞
桑原 尚夫・大串 健吾（1983）「アナウンサー音声の音響的特徴」『NHK 放送科学基礎研究所報告』NHK 放送科学基礎研究所

氏名：小川晋史

所属：熊本県立大学

演題：福岡市方言における「確信」を表すイントネーションについての初期報告

要旨：福岡市方言の中年層（40 代）話者の発話データをもとに、当該方言に「確信」という対事的モダリティーを表すイントネーションが存在することを論じる。具体的には、このイントネーションは、文末もしくは文末の接語（=ヨ、=バイ、=クサ、＝ト、等）の直前のピッチの山を高くすること（pitch boost）で実現される。また、平叙文でも疑問文でも用いられ、真偽値がいずれの場合にも使われ得るものであるため、生産性が高いといえる。「確信」の根拠についても、強い根拠がある場合から何の根拠もない場合まで使える。

以下に例（１～4）を示すが、↑が「確信」イントネーションの印である。

例）　１，うまいと？（標準語訳：おいしいの？）

２，うまい↑と？（標準語訳：おいしいの？おいしいはずないでしょう。）

３，全部、食べとーよ。（標準語訳：全部食べてしまっているよ。）

４，全部、食べとー↑よ。（標準語訳：全部食べてしまっているに決まってるよ。）

以上

The Prosodic Realization of Accented Words after NPI: Gender-based Differences

Le Xuan Chan, Keitaro Mitsuhashi, Kotone Sato, Rina Furusawa,
Rin Tsujita, Seunghun J. Lee
International Christian University

Abstract

A sequence of accented words in Japanese displays downstep (Ishihara, 2015). In this paper, we report prosodic patterns of accented words adjacent to an accented negative polarity item (NPI) *chittomo* 'barely', illustrated in (1).

(1)	Anna-ga	chittomo	wine-wo	nonde-na-katta
	Anna-nom	barely	wine-acc	drink-neg-past

'Anna did not drink any wine'

We collected data varying the position of accented NPI from four speakers (2 male, 2 female) who produced sentences that vary in accent types. As shown in figures 1 and 2, the NPI *chittomo* (the part between the two circles) shows pitch reset.

The male speaker in figure 1 shows typical prosodic patterns of accented words with a visible H*L contour on each accented word. The pitch range of the object and the verb following the NPI is compressed, but the downstepped accent is still observable. The prosody of the female speaker in figure 2 differs from the male speaker in that (a) the pitch range of accented words preceding and following the NPI is compressed, and (b) the accented word after the NPI is deaccentuated.

We propose that these prosodic discrepancies differences stem from the difference in the prosodic status of a phonological word in these speakers. In our study, male speakers maintain the phonological word category, while female speakers do not.

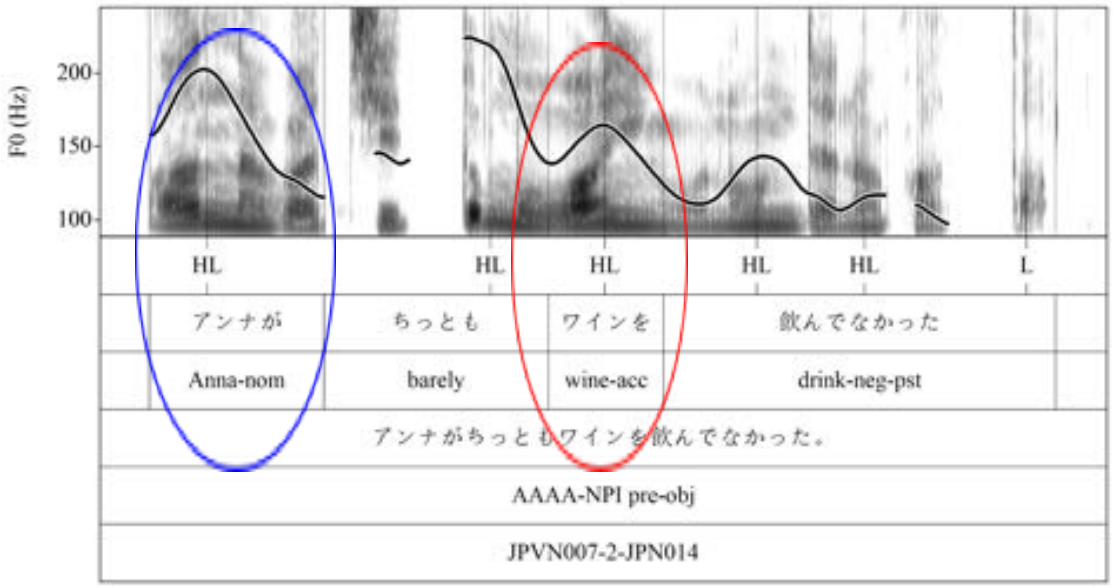

Figure 1. Production of (1) by a male speaker

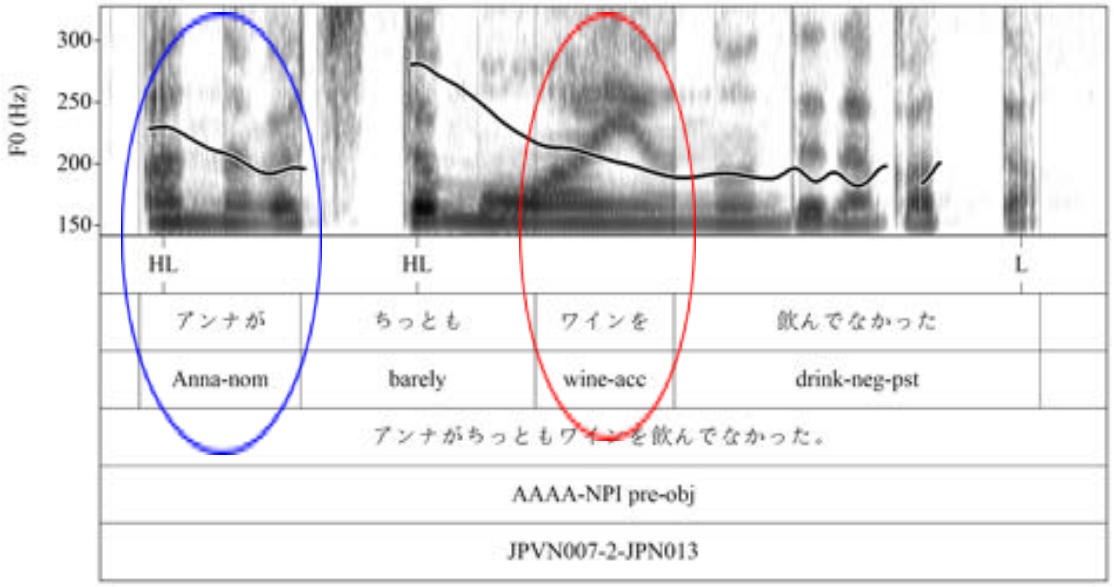

Figure 2. Production of (1) by a female speaker

References

Ishihara, S. (2015). 14 Syntax–phonology interface. In *Handbook of Japanese phonetics and phonology* (pp. 569-618). De Gruyter Mouton.

氏名：吉田樹生
所属：東京大学大学院人文社会系研究科
演題：シンハラ語における「限定」のとりたて表現と語順：コーパスを用いた研究
要旨：
文中の要素を際立たせ特別な意味を加えるとりたて表現は、日本語の研究で重要な概念である (野田 2019)。シンハラ語にもとりたてを表す助詞があり、そのいくつかは特別な動詞接辞 (*-e*) と呼応する (岸本 2019)。さらにそれらいくつかのとりたて表現では、基本語順の SOV とは逸脱して、とりたてられた要素は動詞直後にも現れうる。例えば、とりたて助詞 *witərai* を伴う (1), (2) はどちらも同じことを表す。

(1)	*məmə*	*paan*	*witərai*	*kææw-e*
	1SG	パン	だけ	食べる.PST-E

「私はパンだけを食べた。」

(2)	*məmə*	*kææw-e*	*paan*	*witərai*

本研究ではウェブニュースのデータを利用して、とりたて助詞のひとつである限定の *witərai* がつく場合に、(1), (2) いずれの語順が多くなるのかを調べた。その結果、22 例のうち 19 例 (86.4%) で (2) のように動詞後ろに現れていた。これは、(2) の語順が可能なとりたて表現全体のうち、71% の例が (2) の語順であるという Herring & Paolillo (1995) の報告よりも多い。このように本研究では、とりたて表現の意味が助詞によって表されることに加え、特定の語順とも結びつきうるものであることを示す。

移動表現における多重表示の冗長性と類型論

長屋尚典 (東京大学)
鈴木唯 (東京大学)
谷川みずき (東京大学)
林真衣 (東京外国語大学)
諸隈夕子 (東京大学)

言語類型論において言語表現の冗長性は経済性の観点からも類像性の観点からも避けられるものと考えられてきた。ある意味を異なる形式で複数回表現する現象は、経済性の観点 (例: Haspelmath 2021) にたてばコストの高いものであるし、one form–one meaning という類像性の原理 (例: Croft 1990) からも外れたものである。しかし、この冗長性は移動表現においてはよく観察される。既に松本曜 (2017) が明らかにしたように日本語をはじめとする諸言語で同一経路概念が一文中で多重に指定されるのである。本発表では、この移動表現における多重表示の冗長性の問題に実験研究から取り組む。具体的には、国立国語研究所共同研究プロジェクト Motion Event Descriptions across Languages (MEDAL) による実験研究の成果をもとに、世界の言語において経路概念の多重表示は例外ではなく標準的な状態であること、どのような多重表示も許されるわけではなく、「主要部 + 主要部外」「主要部外 + 主要部外」はあっても「主要部 + 主要部」はないこと、多重表示のパターンによって言語や経路概念がいくつかのクラスターに分かれることなどを実証的に示す。こうして本研究は移動表現の類型論に新しい視点を提供する。

Prosody and Grammar Festa 6
ポスターセッション 発表応募

【氏名】宮岡 大
【所属】九州大学大学院人文科学府（大学院生）
【題目】愛媛県中予方言の主格標示と対格標示: Differential Argument Markingに着目して

【要旨】
本発表では，愛媛県中予方言の主格と対格について，有形標示と無形標示がされる条件を論じ，それを通方言的に位置づける。
最初に，調査票調査の結果から，主格で有形標示（=ga）と無形標示，対格で無形標示と有形標示（=o）がされることを示す。これらの示差的項標示（Differential Argument Marking; DAM）を，文における焦点位置（文焦点，項焦点，述語焦点）・S項の絶対的有生性（人間，動物，無生物）・A項とP項の相対的有生性（有生性の高さがA > P，A = P，A < P）によって記述する。加えて，この調査結果が自然談話の調査結果とも矛盾しないことを示す。
次に，中予方言のDAMを通方言的に位置づける。Shimoji (2018) は，日本語諸方言の対格標示について，相対的有生性によるGlobal DOM，絶対的有生性によるLocal DOM，有生性によらず同一対格のGeneralizingという3タイプに類型化し，これらを階層で一般化する。本発表では，この対格標示の類型化と同様に主格標示を類型化し，一般化の階層を拡張することで，中予方言のDAMを位置づける。

Shimoji, Michinori (2018) Dialects. In: Hasegawa, Yoko (ed.) *Cambridge Handbook of Japanese Linguistics*, 87–113. Cambridge: Cambridge University Press.

（要旨412字）

松本曜（国立国語研究所）・氏家啓吾（国立国語研究所非常勤研究員・東京大学大学院人文社会系研究科）

日本語における状態変化の類型的特徴：構文の多様性とその頻度

諸言語において状態変化を表す表現は移動を表す表現と平行的であることが主張され、類型論的な主張がなされてきた。しかし、今までの研究では、状態変化を表す表現の網羅的な考察や頻度の調査は行われていなかった。本発表では、〈死〉〈ガラスや卵の破壊〉〈清浄化〉〈赤化〉を表す日本語の構文について、分類語彙表などを用いてこれらの状態変化を表す表現をリストし、その頻度と使われ方を BCCWJ の書籍サブコーパスを用いて調査する。その結果以下のことが分かった。1) 〈死〉と〈破壊〉については動詞のみで状態変化を表すことが圧倒的に多く、「粉々に」のような主動詞以外の表現（結果句）はきわめて限定的である。2)〈清浄化〉については、「洗う」など綺麗になることを予測させるような動詞を使うことが多く、結果句の使用はやはり稀である、3)〈赤化〉については「赤くなる」のように、結果状態を補語、変化を動詞で表すことが多い。このように、日本語においては動詞で変化を表す頻度が高いという類型的特徴を持つが、状態の種類によって差がある。移動においても事象による差があり、移動と状態変化の平行性は単純ではない。

P&G6 ポスター発表申込

閉鎖音と後続母音間に見られる同化効果及び対比効果

石橋頌仁（福岡大学人文科学研究科）
竹安大（福岡大学）

日本語においては長音と促音の共起が避けられやすいことが知られており（hit → ヒット；heat → ヒート（*ヒーット））、この傾向は音声知覚においても観察されることが明らかとなっている（石橋・竹安 2021）。このような知覚のパターンは超重音節の生起を避けようとする制約に起因する可能性が指摘されているが（Takeyasu & Giriko 2017）、もしこれが正しければ、促音と長母音が隣接して共起するが超重音節を形成しないような構造の語（e.g., CVCCVV）の知覚においては、促音と長母音の共起が避けられることはないはずである。この予測が正しいかどうかを検証するため、2 音節語の無意味語を用いて閉鎖音とその後続母音の音韻的長短の判断に関する知覚実験を行ったところ音声知覚において長音と促音の共起が避けられやすいという傾向は、超重音節を形成しない条件においても観察されることが明らかとなった。

Prosodically prominent clitic: the exclusive particle *tu* in Swahili

Shigeto Kamano (International Christian University)
Yuko Abe (Lanzhou University)
Kumiko Miyazaki (Global Center for Kiswahili Studies and Advancement)
Seunghun J. Lee (International Christian University, University of Venda)

The exclusive particle *tu* in Swahili means ‘only, exactly, simply, merely’, which corresponds to the adverb **túpú* 'only, in vain' in Proto-Bantu (Meeussen 1967). Morphologically, Swahili *tu* behaves as an enclitic that attaches a preceding verbal host (in a VP) as in (1a) or a phrase-final nominal host (in a DP) as in (1b).

(1) a. Verbal host *wa-melela*
Wa-tu wa-me-lela tu.
cl2-person cl2-PRF-sleep TU
'The people are just sleeping' (Ashton 1944)

b. Nominal host *ma-wili*
n-a-taka ma-wili tu.
I-ABS-want cl6-two TU
'I want only two (eggs)' (Ashton 1944)

Prosodically, *tu* is the most prominent element in a phrase or an entire utterance (figure 1), unlike clitics that are often prosodically weak (cf. Selkirk 1996). In figures 2 and 3, phrases that immediately adjacent to *tu* show pitch compression; a prosodic pattern comparable to post-focal compression in Japanese (cf. Ishihara 2015).

This prosodic nature of the particle *tu* has not yet been reported in the Swahili literature. The prosodic pattern demonstrates that the enclitic *tu* in Swahili is a focus particle that is not only most prominent in a prosodic domain (even in an entire utterance), but also compresses the pitch of adjacent phrases.

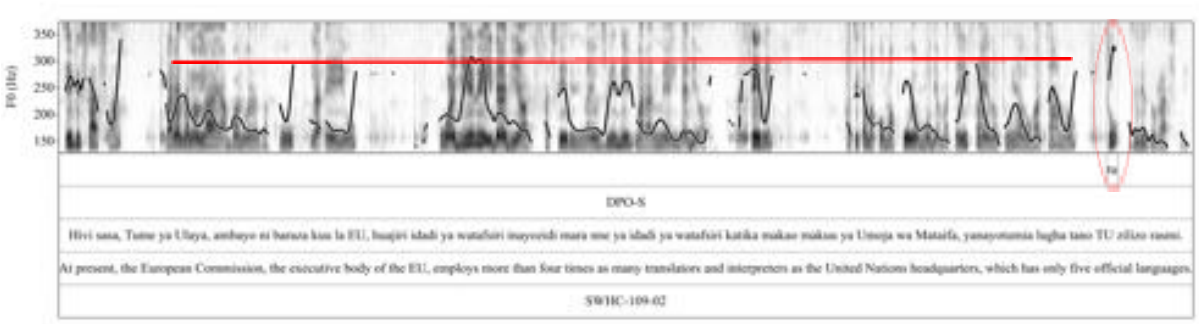

Figure 1. Prosodically prominent *tu* in an utterance that is composed of multiple intonational phrases.

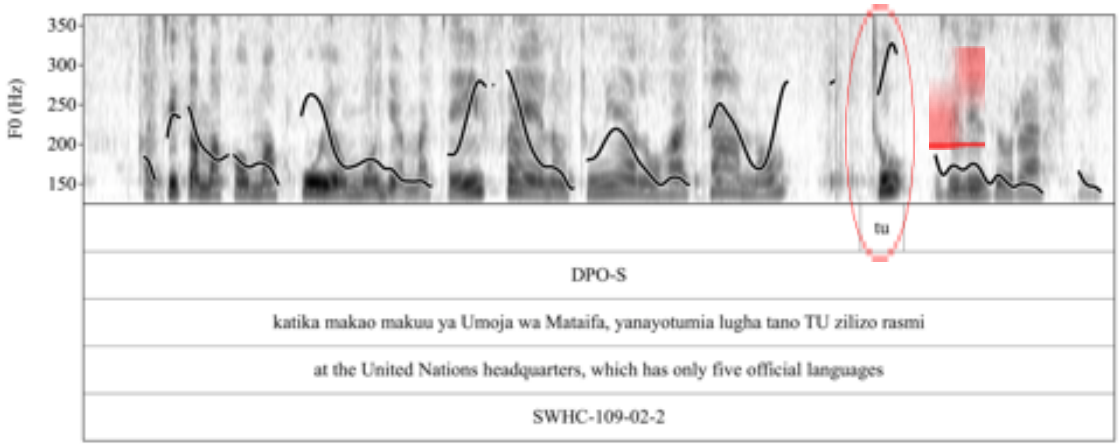

Figure 2. Pitch compression of the phrase *zilizo rasmi* 'that are official' following *tu*

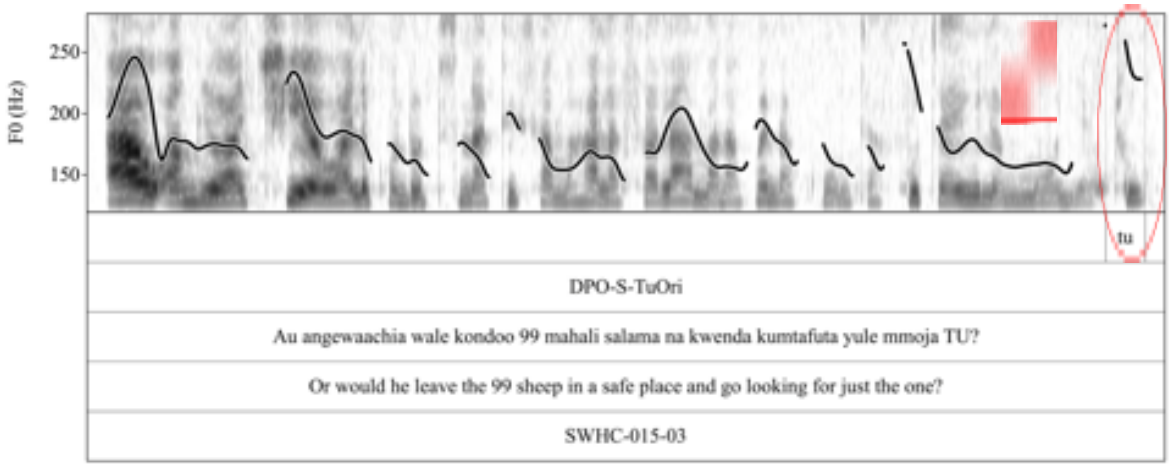

Figure 3. Pitch compression of the phrase *yule mmoja* 'that one' preceding *tu*

References:

Ashton, E. O. (1944). *Swahili grammar (including intonation)* (pp. xii, 398 p.). Longmans.

Ishihara, Shinichiro. "Syntax–phonology interface". *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*, edited by Haruo Kubozono, Berlin, München, Boston: De Gruyter Mouton, 2015, pp. 569-618.

Meeussen, A. E. (1967). Bantu grammatical reconstructions. *Africana Linguistica*, *3*(1), 79–121.

Selkirk, E. (1996). The prosodic structure of function words. In J. L. Morgan & K. Demuth (Eds.), *Signal to syntax: Bootstrapping from speech to grammar in early acquisition* (pp. 187–213). Lawrence Erlbaum Associates, Inc.